

目的 薫物による香粧はわが国ではWoodyな香りが主で欧州では花香が中心であるのと較べて特殊である。しかもそれは和服と深く結びついている。和服と通常服と香粧の有無が生体にとってどのような影響を与えるかを知ろうとした。

方法 人工気候室において室温25℃、湿度60%、室温25℃、湿度60%の2条件において衣服重量を等しくした和服(表地絹100%の白羽重二、裏絹100%の白輸出羽重、袖丈50cm、身長158cm、後幅30cm、前幅24cm)とワンピースドレス(被験者の体型によくフィットするよう綿100%平織)を用いた。用いた香は「すぐれてしめやかな一沫の哀愁をそそる、白いの荷葉」を用いた。この香の主成分である次香をGC-MS(日本電子JMS-300型を使用しイオン化法を用いて成分を調べた。坐位で薫香を聞くことができるようにして、其香のないステンレス張りの人工気候室において、和服—洋服、香のあるなしについて瞳孔の対光反射の影響を調べた。

結果 薫香した場合には、光刺激後の変化面積値(A) 縮瞳速度の最高値(VC)散瞳速度の最高値(VD)、縮瞳加速度の最高値は何れも、薫香しない場合に比して小さな値を示した。また、和服の場合はA₀を除いて何れもVC、VDまた初期状態での面積値(A₀)初期状態での直径(D)瞳孔が散瞳して、最小の63%まで回復するのに要した時間(T₆₃)は洋服に比して有意に大であった。温度条件25℃のA₀、T₆₃、VDおよび光刺激から変化面積の1/2まで変化するのに要した時間何れも大きな値を示した。香りにはBenzaldehyde, Phenol, 4-ethyl Phenol等が含まれ、薫香で副交感、和服で交感神経緊張型の傾向と考えられた。